

国立大学図書館協会地区協会助成事業 実施報告書

地区名	近畿地区（主担当大学： 兵庫教育大学）
事業名	Where am I?（ここはどこ?）：図書館という場を問い直す
事業目的・趣旨	<p>図書館はいま、歴史的な変革期にあるといえる。ウェブスケールがどんどん膨張し、図書館の「お株」が奪われつつあるなかで、とりわけその空間的意義がきびしく問われつづけています。近年のアクティブラーニングスペースや快適性を重視したコミュニケーションスペースの建築・改修ラッシュは、それに対するひとつの解答といえるのではないだろうか。しかし、本当にそれでいいのか。それだけでいいのか。ということ今回問い直してみたい。大学の個性化が求められている今だからこそ、個性の強い関西だからこそ、もっとオモロイことは考えられないか。今回の研修会では、参加者が頭のなかの粘土をいったんぶよぶよの原初の状態に戻した上で、コミュニティの場としての今後の図書館の可能性について、気軽にしかしラディカルに語りあいたい。具体的な知見とか実務的なノウハウを得ることが目的ではなく、むしろこの「ぶよぶよ」をしつとりと保ったまま現場に戻っていただくこと。そして、あわよくばそこから各大学の個性に応じたオモロイ「造形」が練り上げられていくこと。それが、本研修のゴールとなる。</p>
実施内容	<p>1 日時：平成 27 年 9 月 3 日（木） 13：00～17：00</p> <p>2 場所：兵庫教育大学附属図書館</p> <p>3 内容：</p> <p style="padding-left: 20px;">（1）オープニングコンサート</p> <p style="padding-left: 40px;">[概要]</p> <p style="padding-left: 40px;">附属図書館長による開会挨拶に続き、館長と本学大学院生によるピアノとフルートの二重奏が披露された。</p> <p style="padding-left: 20px;">（2）昼食会（情報交換会）</p> <p style="padding-left: 20px;">（3）講演 「染み出す本棚」</p> <p style="padding-left: 40px;">ブックディレクター・幅允孝氏</p> <p style="padding-left: 40px;">[概要]</p> <p style="padding-left: 40px;">始めに、書店員としてキャリアをスタートした幅氏が、人と本との出会いを演出するブックディレクターとしての活動を開始するに至った経緯と目的が述べられた。続いて、これまで手掛けてきた仕事（新宿伊勢丹 BEAU</p>

TYAPOTHECARY や国立新美術館 SOUVENIRFROMTOKYO などの本屋づくり、「城崎裁判」などの本づくり) について紹介された。また、近年の取り組みとして、京都市動物園や高木学園女子高等学校、さやのもとクリニックのライブラリーの設置・改修に携わった経験に触れながら、本を選ぶときはあくまで個と向き合うこと、人と本が出会う「結節点」を探すこと、そのために磁場や人の流れに従うことが重要であることなどが述べられた。

後半では、魅力的な本棚を運営するためのヒントが、「編集」という視点から具体例と共に紹介された。たとえば、従来の図書分類とは異なるセグメントで本を配置しなおすことで、利用者の既視感を裏切り立ち止まらせる魅力的な本棚になりうることや、近年搭乗手続時間の短縮により滞留時間が短くなった空港のショップでは、選べる本が多いことよりも少ないこと（厳選された本を置くこと）の方に優位性があるといった指摘があった。ここでは、「何を選ぶか」よりも「選んだものをどのような環境に置くか」に力点を置く、「エディット（編集）」の発想が重要になることが強調された。

講演終了後の質疑応答では、参加者より「選書や展示のマンネリ化について悩んでいるが、アドバイスをいただけないか」との質問があった。これに対して、幅氏より、社会のニーズに合わせた展示を行っている新宿伊勢丹ビューティーアポセカリーを例に、図書館職員など本に携わる者は、世の中の空気感や動きを察知することが求められていること、また、最も悪い展示は、空間（ブランク）を埋めるために行われる展示であることが述べられた。

(4) ワークショップ<ワールドカフェ>

テーマ「活気のあるコミュニティ」

[概要]

ワークショップでは、多様な意見や考えに出会い、新たな気づきや学び、疑問や問いを生みだすことをねらいとして、研修参加者である職員と本学の学生・教員が「活気のあるコミュニティ」についてワールドカフェ形式で

対話する場を設定した。具体的には、1グループ4～5名に分かれ、1回20分の話し合い（対話）を、途中で席替えをしながら、3回実施した。各テーマは「あなたが今まで経験したり、参加した中で最も活気のあるコミュニティとは、どのようなものでしたか?」「もし、図書館が活気のあるコミュニティの場になったら、何が変化すると思いますか?」「活気のあるコミュニティの場としての図書館にはどのような魅力や可能性がありますか?」。

(5) フリータイム

<トークセッション> 「<読みたくなる>場所」

建築家・多田正治氏 + デザイナー・遠藤正二郎氏

[概要]

京都の町家や古民家のリノベーションを数多く手がけ、カフェやオフィスなどの設計のほか、家具や書架のデザイン、本の装丁など空間デザインからモノづくりに至るまで幅広く活躍している建築家・多田正治氏とデザイナー・遠藤正二郎氏を講師に招いたトークセッション。階段や橋の欄干など人が読書する場所を街場で探索したフィールドワークを紹介しながら、空間や環境、アフォーダンスの視点から、人が本を読みたくなる場所を多数の模型と共に提案した。

<ギャラリー見学>

[概要]

PA0内の壁面・柱面書架等を使った本の企画展示を行った。※別紙プログラム参照

①ボクブック・ムービー

本学学生・教職員によるお薦め本の紹介ムービーをスクリーンで放映。

②ボクブック・シェルフ

「書くということ」をテーマに、日記や手紙に関連する本を、大正期に使われていた日記帳（教材文化資料館収蔵）や郵便ポストのオブジェなどと共に展示。

③ボクブック・トレード

本と本、本とモノをコメント付きで贈与交換する企画。

④ボクブック・マニア

鉄道マニアのスタッフが、鉄道模型と共に関連本を展示。

⑤ボクブック・アダルト

黒い引き戸のある本棚。深い味わいのある大人向けの小説などを隠すように配架。

⑥ボクブック・ペア

膨大な蔵書のなかからメディアを問わず、独断と偏見で理想的な組み合わせを提案し、セット貸出を行う企画。

⑦ボクブック・ラボ

テントを使った可動式簡易研究個室の提案。

⑧ボクブック・クール

木製冷蔵庫に氷を入れて実際に本を冷やす企画。

また、会場に併設された教材文化資料館展示室に置いて、編集工学研究所による読書イベント「編集で変わる読解力のひみつ：20分で言いたいことをつかむ新・読書術ワークショップ」を開催し、研修参加者は見学を行った。

その他、学生バリスタによるコーヒー・サービスや丸善による会場での本の販売を行った。

(6) リフレクション (振り返り)

[概要]

本研修での気づきや学びをより確かなものとするために、研修全体を振り返る時間を設定した。特に、今回は言語化することと、他者と学びを共有することに主眼を置いた。具体的には、まず「本研修を通しての気づきや学び、疑問や問い」を各自で付箋に書き出した。次に、グループ内で付箋の内容を共有し、意見交換した。最後に、参加者全体の前で個人（希望者のみ）が付箋の内容を共有した。加えて、各自の付箋を1枚の模造紙に貼ることで、研修終了後に他の参加者の意見を共有できるようにした。

	(7) クロージング
<p>事業の成果 (アンケート調査結果、事業への意見・感想等)</p>	<p>1 参加者数 研修会参加者は、計28名(国立機関：24名、公立大学：1名、私立大学：3名)。</p> <p>3 アンケートについて ※別紙アンケート結果参照 アンケートは、研修会開催後にウェブにより実施。 無記名方式で、回答期間は1週間とした。 回答は18件で、回答率は64%だった。</p> <p>(1) 数値評価(抜粋)</p> <p>ア) 研修全体の満足度 「非常に満足している」「おおむね満足している」「あまり満足していない」「満足していない」の4段階評価で、「非常に満足している」が94%、「おおむね満足している」が6%だった。</p> <p>イ) 「コミュニティの場としての図書館」について考える(問い直す)ことができたか。 「非常に当てはまる」「おおむね当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の4段階評価で、「非常に当てはまる」が56%、「おおむね当てはまる」が39%、「あまり当てはまらない」が5%だった。</p> <p>ウ) 今回の研修を通して、自館でも何かしてみようという気持ちになったか。 「非常に当てはまる」「おおむね当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の4段階評価で、「非常に当てはまる」が50%、「おおむね当てはまる」が39%、「あまり当てはまらない」11%だった。</p> <p>(2) 自由意見(抜粋)</p> <p>ア) 良かった点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「お堅いイメージのある、国大図協の事業にしては、なかなか、新しい趣向ではないでしょうか。」 ・「図書館関係者ではない方々からの視点でお話を聞けたこと。図書館関係者ではない方々と一緒に受講して議論できたこ

	<p>と。(同業者だけで考えても限界があるから)」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「PAOの空間が、遊び心や斬新な試みに満たされていて、とても居心地が良かったです。実際に「場」を提示してくださったことで、良いイメージが湧いてきました。」 <p>イ) 改善すべき点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「講演の配布資料等がなかったこと。報告書を出さなくてはならないのと、職場での共有に困るのとで、なにかしら研修内容がわかるものを配布して頂けると助かります。」 ・「参加者のみなさまとは多くお話ができたのですが、ホストの皆さまにお話を聞ける機会が少なかったのが残念でした。」 <p>3 総括</p> <p>今回、「図書館という場を問い直す」というテーマを実現するため、研修会の方法自体も問い直すこととなった。会場となったラーニングコモンズでのオープニングコンサートや昼食会を兼ねた情報交換会、本学学生・教員を多数交えたワールドカフェ、書店との連携による本の販売、本の展示ギャラリーや学生ボランティアによるカフェが楽しめる長時間のフリータイムなど。非常に実験的な企画ではあったが、アンケートからは内容・方法両面について好意的な意見が多数寄せられ、全体として大変意義のある研修となったと思われる。</p>
経費	150,000 円 (講師派遣料 充孝氏 (BACH 代表) 1 名 (旅費込み))